

特集記事・2

都市景観

街路の成り立ちと景観

Composition and Townscape of Streets

陣内秀信 法政大学 工学部 教授
Hidenobu Jinnai

1 はじめに

もう17、8年前になるが、様々な学問分野の方々と一緒に、「東京の文化としての都市景観」という刺激的な研究会を数年間にわたって行ったことがある。土木の分野で景観工学を切り開かれた樋口忠彦氏に誘われて加わったのだが、そこには、歴史学、美術史、文学、民俗学などの分野のそうそうたる研究者が集まっていて、東京の景観について、多彩な視点から議論することができた。景観はまさに文化の現れなのだ、ということが実感できたのは、私にとって大きな収穫であった。

自分自身、イタリアの都市研究を皮切りに、これまでイスラーム世界を含む地中海地域、そして中国、東京を中心とする日本の都市の歴史的な研究を行ってきた。どの地域を訪ねても、興味深い都市や住宅の空間構造があり、それが個性ある景観を形づくっているのに感銘を受ける。

気候風土が異れば、おのずと建築の形態も違ってくる。材料も、その色調も変わる。窓の大きさ、屋根の勾配も様々だ。住宅の平面形式や、建物の並び方、配列の仕方も違う。民族性や過去の歴史の在り方も、そのまま建築や町並みの景観の違いとなって現れる。それらは、住まい手、あるいは市民の美意識を形成している。

そもそも都市は、人間がつくった最も大きな芸術品といってもよからう。一人の偉大な指導者や建築家、都市計画家の力だけではどうにもならない。そこに生まれ、住み、営みを行ってきた大勢の市民の力やセンスの総和が独特の美しさをもった景観をつくり上げている。そこに地域の文化が成立している。

ここでは、景観を論ずるのに、「街路」に注目してみたい。街路は実は、交通手段としてだけ捉えたのでは間違いである。人々の暮らしの舞台であり、様々な活動や交流が行われる活気のある場である。文明批評的な建築・都市論によっ

て大きな影響力をもったB.ルドフスキーの『人間のための街路』は、街路のもつ多様な意味について見事に描き出している。特に、ヨーロッパ都市のような広場が発達しなかった日本やアジアの都市にとっては、街路は広場の役割をも果たしてきた。

本稿では、街路のこうした多様な意味、機能をも考えながら、それぞれの文化圏でいかなる景観をつくってきたのか、幾つかの視点から論じてみたい。

2 商店街の在り方

世界のどの国でも、都市に活気を生む上で商店街の役割は重要である。ところが、その商店街の在り方、景観というものは、国によってずいぶん違っている。

日本では、江戸時代から、商人たちは、いわゆる「町家」に住み、表側に店を構えて商売を行ってきた。京都の格式のある町家を筆頭に、それぞれの町に特徴ある町家の形態、意匠を生み出し、都心に町人の住むいわゆる町人地の景観をつくり上げた(図1)。道を挟んだ両側が、一つのコミュ



図1 竹原(広島県)の町並み

ニティであり、社会的な結束をもってきた。商店街はこうして、日本では本来、人々が住む場所でもあった。家族もそこにいるし、商家の奥さんは、店の切り盛りに活躍することも多かった。路上が遊び場になり、また社交場になる必然性もあった。また、立派な町家が並ぶ街路の景観は、格調の高い象徴的な美しさを生み出してきた。

瓦の屋根や庇が出て、正面の外観を飾るというのが、町家のデザイン上の特徴だったが、昭和の初期には、洋風建築からの影響で、いわゆる「看板建築」が登場した。耐火性を高めるべく、銅版やモルタルで外部を覆い、そこにアーチやオーダー(柱の装飾)を付けて、ヨーロッパ建築のファサードのような建築の造型を見せるようになった。でも、人々はそこに住み続け、下町らしさを示してきた。

ところが、世界の中には、まったく事情を異にする文化



図2 チュニス(チュニジア)の布地スーク

圏がある。西アジアや北アフリカのアラブ諸国のイスラーム都市がまず、興味深い。商店街は「スーク」と呼ばれ(ペルシア語のバザールにあたる)、旧市街の中心部を占めて、今なお活気に溢れかえっている。そこでは、小さな店舗が壁を共有しながら連続して並び、密度の高い商店街を形成している(図2)。どの店も特化した商品を売っている。ゾーニングがはっきりしており、香料、カーペット、布地、履物などの業種ごとに分かれ、独特の界限をつくっているのだ。

そこには、人々は住んでいない。背後に広がる住宅地に彼らは住んでおり、数分かって、自分の店に通ってくる。店で働くのは男性である。夜はシャッターを下ろして、帰宅する。ヨーロッパから始まり世界中に広まった、都市の職住をゾーンで完全に分ける発想を、実はイスラーム都市は先取りしていたとも言える。商業に特化したスークは、ともかく賑やかである。呼び込みも活発だ。騒音もうるさい。まさに世界中から商人や旅人が集まる国際的な都市なのである。だが、もっぱら人間のための空間であり、せいぜいロバや馬しか受け入れず、今も車は入れない。ヒューマン・スケールの都市空間といえる(図3)。

暑い国だけに、商品を直射日光から守るため、商店街には屋根が架かる傾向がある。簡単によしずや布を被せることから始まって、石でドームやヴォールト(アーチを組み合わせてできる曲面天井)の立派な覆いを被せるように変化した。人工環境化するので、暑い夏でも、けっこう涼しい。ただし、現代人には、いささか暗いので、人工的な照明が昼間でも欠かせない。

所々に奥へ入る立派な入口がとられ、裏手にモスクやハーン(隊商宿。ペルシア語ではキャラバンサライ)、あるいは公衆浴場が設けられている。あるいはマクハーと呼ばれるカフェがとられ、路上に小さな椅子を並べて、コミュニティの人々の溜まり場になっている(図4)。こうして



図3 アレppo(シリア)のスークにあるロバのステーション



図4 ダマスカス(シリア)のマクハー



図5 トレント(北イタリア)の広場に面する町並み

スークの商店街に多様な変化が生まれ、楽しい景観が生み出される。

では、ヨーロッパ都市ではどうだろう。実は、ヨーロッパでは、街路に面する建物の多くは、一階に店舗、上に数階分の住宅というつくりが多い。都心に今も、たくさんの人が住んでいる。パリやミラノの街路を思い浮かべるとよい。店舗は、立派な大きい建物の一階の道路際に組み込まれているに過ぎない。そして所々、一階にはカフェなどもとられる(図5)。整然とした町並み景観も、こうしたヨーロッパ都市の特徴である。商店ばかりが並ぶ賑やかな商店街というものは、ヨーロッパにはあまり存在しない。

一階の店舗では、上に住んでいる人が働いているわけではない。たいてい外から通ってくる。発生的にも、ポンペイの遺跡都市を観察してもわかるように、大きな邸宅の道路側の一室が店舗として貸され、そこで商売が営まれるのである。建物が高層化しても同じで、一階の道路側に店が並び、そこに通ってきて商売をするのである。住まいと仕事場が一体となった日本の伝統的な町家の在り方に、ヨーロッパの人々が興味をもつのもうなずける。

3 路地の雰囲気

都市を魅力的なものにする要素として、路地がある。古い歴史をもった都市ほど、路地が発達してきた。一方、近代の計画的につくられた都市は、路地を排除する傾向を見せた。自動車優先の都市に、路地は存在しない。

車がまったく入らない「水の都」ヴェネツィアは、路地が発達した都市として注目される。中世の段階から人間の都市空間とし、馬も禁止した都市だけに、ヒューマン・スケールの街路網ができあがった。水路がその代わり、重要な交通路であった。そして各島の中心にカンボと呼ばれる



図6 ヴェネツィアの庶民地区に見られる路地



図7 月島(東京)の路地

広場がある。路地はその広場から、あるいは背骨にあたる主要道路から分岐して裏の運河まで伸びている。日本の路地と同様、そこには長屋に似た横に長く延びる集合住宅が並んでいる。ちょっと広めの路地だと、そこに雨水を蓄える貯水槽が設けられている。面白いのは、路上に洗濯物がはためいていることだ。両側の壁に滑車をつけ、ロープを二重に渡し、洗濯物をたぐることができるようにしている(図6)。両側の住民が話しあいのもとで合意して、こういう空中を上手に利用しているのである。

一方、日本の路地の典型といえる東京の月島を見てみよ

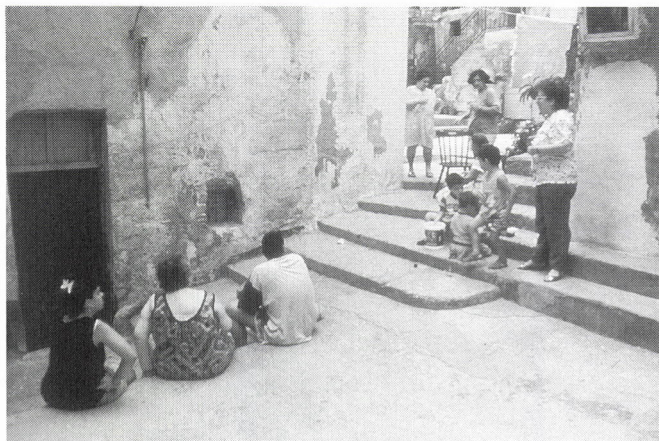


図8 シャッカ(南イタリア)の袋小路



図9 ダマスクスの住宅中庭

う。明治中期に計画的にできた路地である。江戸の伝統を継承しているが、両側が抜けられる開放的な路地である。両側の長屋の前には、住み手が丹精込めた盆栽、植木鉢が所狭しと並べられ、下町ならではの見事な私設植物園を形づくっている(図7)。それとともに、自転車や生活道具が平気で外に置かれるということもある。半プライベートな空間として、使いこなされているため、そこには生活感がたっぷりと現れることになる。

それに対し、ヴェネツィアの路地では、公私のけじめがはっきりしているから、壁面線はそろい、家の前に個人的なモノが置かれることは絶対ない。

同じイタリアでも、南に行くとも事情はずいぶん違ってくる。彼らの生活にとって、路地を囲んで住む家族の間での近隣コミュニティの暮らしがきわめて重要だった。シチリアの小都市シャッカには、無数の袋小路がある(図8)。その中には、5〜20家族くらいの人々が住んでいる。路地の奥には、精神的な絆として、マリア像の小祠がある。かつ

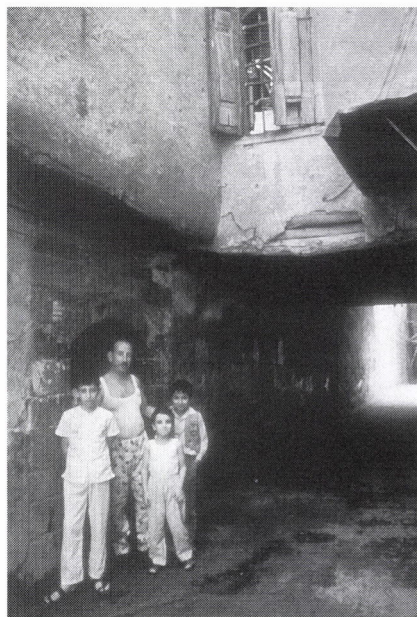


図10 ダマスクスの路地

ては、共同の洗濯桶を使っていた。毎日、晩になると夕涼みで大勢の住民がここに出て、夜遅くまでおしゃべりをを楽しむ姿が今も見られる。椅子が夜も出しっぱなしの所もある。他所者は入ってきにくい空間なのである。しかも、日本の路地より広くて快適である。住民の共有の小広場といった感じの空間である。

海の向こうのアラブ世界にも、こういった袋小路が発達している。ところが、雰囲気が違う。そこでは、路地に面した家々は、中庭を内側にもち、人々の暮らしはむしろ、その中庭側で繰り広げられる(図9)。家族の私的な生活の風景は、外側にはまったく現れない。中庭は、こうして家族プライバシーを守る必要のあるイスラーム教徒の社会にとって、実に都合がよかった。

従って、独特の雰囲気をもつアラブ世界の路地は、基本的には各家へのアプローチの空間である。窓もほとんどなく、壁がどこまでも続きながら、折れ曲がり、上にトンネルが被さり、まさに迷宮的な面白さを見せるのである(図10)。

4 アーケードの構造

近代の都市が生み出した魅力ある街路として、パッサージュとかアーケードと呼ばれるものがある。産業革命が生んだガラスと鉄をたっぷり使って、近代都市の中にさっそうと登場したのである(図11)。細身の鉄骨で支えられたガラスの軽やかなシェルターが架かった明るい商店街であり、その上部には実は、住宅がのっていることが多い。雨にもぬれることなく買物ができた。



図11 ブリュッセルのパッサージュ



図13 ミラノのガッレリア

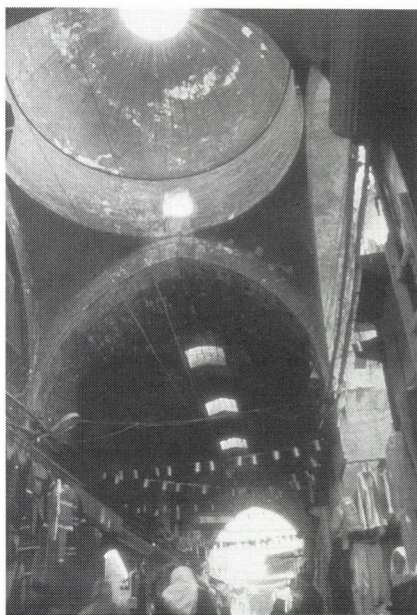


図12 アレッポのスーク



図14 阿佐ヶ谷(東京)のパールセンター

18世紀頃から、ヨーロッパの大都市では、馬車を前提とし、広くてまっすぐな街路をどんどんと建設していった。建築のスケールも大規模化していった。パッサージュは、それに対して、ヒューマン・スケールを維持し、人間が主役として格好よく振る舞える魅力あふれる場所としてつくられた。エレガントな店舗が並び、その中に洒落たカフェが置かれた。また劇場や映画館もしばしば設けられ、それを中心に象徴的な空間構成を見せるものが多い。街路が交わる重要なポイントには、しばしばガラスと鉄骨を組み合わせた華麗な透明のドームが置かれ、空間的な効果を高め

ている。そしてパッサージュの建設には、街区の内部を有効に利用するという、土地利用上の合理性がその背後にあった。大規模な施設の跡地を高度に有効利用するために登場したパッサージュも多い。

こうしたパッサージュ、あるいはアーケードは、19世紀前半のパリに生まれた。そのルーツは、中東のイスラーム都市のスークに用いられているアーケードにあると思われる。当時、カイロをはじめとするイスラーム都市は、オリエンタリズムの中で、エキゾチックな魅力ある都市としてヨーロッパ人の心を捉えていた。高度に発達したそのアラ

ブ都市のスークの都市空間が、一つのモデルとなって、ガラスと鉄の軽快なアーケードがパリに生まれたのである(図12)。

その後、ヨーロッパ全体に広がり、さらにはアメリカやイスラーム諸国、日本にも伝播した。ただし、その応用の仕方にそれぞれのお国柄が現れていて、興味が尽きない。

パリやブリュッセルのパッサージュは、人間的なスケールのエレガントな街路というイメージが強いが、20世紀の初頭にできたミラノでは、まったく違うイメージの巨大で壮麗なガッレリアという空間として登場した(図13)。いかにも広場の国、イタリアらしく、ガッレリアでは、人々が立ち話をし、パフォーマンス空間として使いこなしている。歩きながら新聞を読んでいる市民も多い。ここに来れば、友人に会える。出会いの場でもある。広いガラスの街路の路上には、堂々とカフェテラスが張り出て、まさに広場という感じである。両側の堂々たる建築は、古典的な様式で一体として設計され、モニュメンタリティを誇っている。

それとちょうど対照的な性格を見せるのが、日本に戦後広がったアーケード商店街であろう。筆者の住む東京杉並の阿佐谷にも、「パールセンター」という愛すべきアーケード商店街がある(図14)。典型的な駅前商店街だ。8月の七夕祭り際には、このアーケード商店街にどっと人が繰り出し、実に晴れがましい場が形成されることになる。

こうした日本のアーケード街では、ひとつ一つの商店は、それぞれ勝手なデザインで建てているが、とりあえず上部だけ、同じデザインのアーケードで統一しようという考え方に立つ。雨でも便利に買物ができ、陽射しも遮れるとい

う機能的なメリットばかりか、アーケードには、商店街の一体感を演出し、賑わいに満ちた親密感のある都市空間を生む、というメンタルな効果が大いに期待されているように思える。ミラノのようなモニュメンタルなガッレリアは、日本的な商店街には似合わない。統一性よりも、多様な変化、くつろいだ雰囲気が重要である。古典的な壁面の統一よりも、四季折々の造花、装飾で飾り立てられた賑やかな気分が必要である。この阿佐谷のパールセンターだが、最近、掛け替え工事が実現して、ドームやアーチの装飾を導入し、まるでイスラーム都市のパザール、あるいはスークのようなアーケードをもつようになった。

このように街路だけを見ても、世界の様々な国で、地域性を背景にして興味ある景観づくりが行われてきたことがよくわかる。景観はまさに文化なのだ、という視点がますます重要になろう。21世紀には、日本の各地でも、それぞれの地域にふさわしい魅力ある景観が形成されていくことが期待される。

参考文献

- 1) 陣内秀信：東京の空間人類学，筑摩書房，(1985)
- 2) 稲垣榮三編：民家と町並み(復元日本大観6)，世界文化社，(1889)
- 3) B.S.ハキーム，佐藤次高監訳：イスラーム都市—アラブ人のまちづくりの原理，第三書館，(1990)
- 4) 陣内秀信：都市の地中海，NTT出版，(1995)

(2000年7月3日受付)